



2008.5.25

150

編集 樋口 みな子

E-mail  
minginga@agate.  
plala.or.jp  
郵便振替  
「銀河通信」  
02740 - 7 - 56535  
(6号分1,000円)

## 見て、歩いて、書いた銀河通信が ついに150号に!

4月23日から21日間、日本山岳会のヒマラヤ環境調査に参加し5月13日に帰宅しました。いろいろと大変なこともありましたが、多民族が暮らすネパールの人々の優しさや大らかさにも触れ良い経験をしました。家族も私の留守の間食事の支度や洗濯などで奮闘しました。

銀河通信がピスターレ(ゆっくり)と20年もかかって今号で150号に達しました。こんなに長く続けたものは、銀河通信が初めてです。ささやかな家族の歩みを親しい人に手紙のように書き始めた通信が少しずつ形を変えて現在に至っています。

依頼原稿は限られた字数がありますからそれなりに文章の構成を考えますが、銀河通信はあまり肩肘を張らずに書いてきました。拙い文章におつきあい下さった読者の皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。

読者から「銀河通信はみな子さんそのものですね」と言われることがあります。そんな時、おおざっぱな私の性格を見抜かれているような気がして恥ずかしくなります。

その時、その時、平和や環境問題に取り組んだり、また山ばかりに夢中になっていた頃もあります。でも今回、海外を旅して平和があつての環境問題だと思いました。

ポカラではチベット難民が暮らす村がありました。宗教の自由を求めて平和的にデモ行進していた若い僧侶たちが、中国の軍隊に殺された写真が何枚も張り出されていました。私が訪ねた寺院では、僧侶の死を悼み成仏出来るようにと沢山の僧侶が祈っているところでした。

思想、信条の自由の尊さが日本にいと当たり前で、あまり深く考えることもなく過ごしていたことに気づかされました。新聞やテレビ報道で知ってはいましたが、彼らの痛みを思いを馳せたことがあつたのだろうかと考えさせられました。

家族や友人と良い時間を過ごすこと、安心して医療や福祉を受けられること、心に残る良質な映画を見る幸せ、そういう具体的な形として平和のかけがえのなさを実感しました。

銀河通信も小さいけれど、ささやかな文化を発信しているのだと思います。20年はそれなりに長かったけれど、もう少し続けていきたいと思っています。これからも応援お願いします。



オスベキア 5月ポカラで

# ヒマラヤ環境調査トレッキングに参加して

北海道からはたったひとりでしたが、日本山岳会の自然保護委員会と科学委員会との共同のヒマラヤ環境調査トレッキングに参加し、5月13日無事に帰国しました。

参加者は17人にアルパインツアーのガイドが2人です。殆どが東京、神奈川からの参加で私は紅一点でした。

4月23日、中国、広州経由で夜中にカトマンズ到着。翌24日、早朝6時に飛行場に行くが、カトマンズは天気がいいのに、ルクラは霧がかかっていて飛行機が飛ばない。こんなことはよくある事



だそうです。25日、ようやくカトマンズから45分でルクラに到着。そこでこれから世

エベレスト(左)と手前の稜線はヌプツェ、  
右はローツェ。 2008.4.26撮影

話になるサーダーたちと合流。サーダーは4人、ポーター12人、コック1人、キッチンボーイ7人、ゾッキョ(ヤクと牛を交配した動物)12頭の大部隊です。

トレッキングとはいえ、厳しい登りが続く登山です。この日はパクディンまで。翌日はナムチェまで、休憩も含めて8時間の登りです。エベレスト街道は、ほこり街道とも呼ばれ、のどが痛くなるほど。ゾッキョのウンチもそこかしこにあるし、ゴミは投げ放題。これにはびっくりでした。ペットボトルも山のように廃棄されていました。

ナムチェの登りはきつかったです。クスムカングルが素晴らしい眺望でした。

ナムチェに近づくと、ザックはいつもの重さなのにすごく重く感じました。空気が薄いのを実感しました。その時まで、とにかく前に行かなくてはとっていました。でも商業登山はそうではない事を、後で知りました。力のある、とにかく登りたい人が前に行くのだそうです。みなはそれぞれのペースで登っていました。まずこの歩き方で、息がきれました。

そののけ、そののけゾッキョが通る



長い吊り橋を幾つも超えて  
ナムチェへ

参加者はそれぞれに役割を持ち建造物、家屋の調査グループ、人口調査、住民の意識調査も行いながら進みました。

私は、住民の意識調査と、流域の環境調査を受け持ちました。ナムチェでは英語を話せるサーダーに仲立ちしてもらい2人で、サーダーを引退したシェルパ族の方の自宅を訪ね、短い時間ですがお話を聞くことが出来ました。生活様式を知るいい機会になりました。また、信仰は生活に根付いており、氷河湖の拡大が深刻になっていることはあまり知られていず、氷河湖の決壊は神さまが守ってくれると、どの人も口を揃えるのには驚きでした。

メンバーの中には、3回もエベレストにサーダーとして登った長老のお話を聞いた人もいました。

# タンボチェで高山病になる



ナムチェで英語が堪能なサーダーを仲立ちに住民のお話を聞く

タンボチェ(3867m)に着いた時は元気でしたが心臓がドキドキして、下痢、頭痛、食欲不振になりました。典型的な高山病でした。前日にマスコミ関係者の女性が亡くなったことも知り、ロジは重苦しい雰囲気。翌日、下山を決意しました。

ナムチエまではツアーリーダーとポーター3人で下山。ここでのんびりしエベレストビューホテルまでのトレッキングコースを3往復して高所順応し宿泊。エベレストやアマダブラムのスケールの大きな山が目の前にそびえ、飽かずに眺めていました。



びっしりと軒を並べているナムチェ・バザールのお土産屋

ネパール人は36種族もの多民族で、各種族は独自の言葉と文化を持っています。シェルパは「東の民」という意味で、1530年頃に東チベットからヒマラヤを越えてやってきたそうです。

シェルパ族は民族としての誇りが高く、信仰心も厚く、殺生を嫌います。鳥を食べる習慣がなくクンブー山域は格段に野鳥の種類と数が多いそうです。私がエベレスト街道を歩いたときも、野鳥の音が大きく一緒に歩いているようで楽しかったです。

私の仲間がイムジャ湖見学で歩いていた時、雪が降り出したそうです。その先でイムジャ湖調査隊が昼食で肉を焼いていた匂いをすぐに気づいたサーダーたちが、「神さまが怒って雪を降らせた」と言ったそうですから昔からの言い伝えは、若い世代にも受け継がれているようですね。



アンブラさんとパクディンのロジのおかみさん

ナムチエ周辺で3泊し、ここからシェルパ族のサーダーと2人でルクラまで2日かかりで下山しました。26歳の心優しく知的な青年でした。体は大きくないのですが流暢な英語を話します。重いザックも軽々と背負います。ゾッキョが通る時は緊張します。大きな荷物を積んで力が強いのです。アンブラさんは、ゾッキョを避けるように私をかばってくれました。涙が出ましたが、アンブラさんには気づかれないようにそっと涙を拭きました。途中のロジで宿泊しながらルクラに到着。翌日、アンブラさんはルクラの飛行場でカトマンズ行きの搭乗手続きをしてくれました。別れの時は感謝の気持ちでいっぱい、涙を禁じ得なかったです。「サンキュー！サンキューベリーマッチ！」後は声になりませんでした。



ナムチェの元気な子どもたち

スズランに似た花アセビ



# のびやかにアンナプルナ連山が広がって

すっかり元気になった私はカトマンズからポカラに。現地日本語のわかるガイドをつけてもらい、ダンブス国立公園をトレッキングして、2200mのロッジに到着しました。ここからのアンナプルナ、マチャプチャレが素晴らしかったです。「処女峰アンナプルナ」のモーリス・エルゾグの世界が広がっていて、感激もひとしおでした。イムジャ湖もカラパタールも行けなかった私は、ひとり「人生には別のアンナプルナがある」と語ったエルゾグの言葉をかみしめました。

アンナサウス、アンナ1、ヒユンチュリ、マチャプチャレ、アンナ、アンナ、ラムジュンが私の目の前に



空に浮かんだ優美なマチャプチャレ

ありました。一瞬の夢であったかのよう

に、あっという間にその姿は雲のなかでした。

ロッジの主人はちょっとエルゾグに似たインド系。麓の高校に通う息子さんは学校から帰ると制服を着替えて、父親の仕事を手伝っていました。たった2軒のロッジですが親戚だそうです。丁度雨期に入る時期で泊まり客は私だ

け。隣のロッジでは広い草原にテントを張った家族が楽しんで

2200mのロッジからアンナプルナ全景 08.5.8撮影

いました。おかみさんはポーターの食事を作っていましたがお飯の多さに圧倒されました。おかずはちょっぴりに、パラパラした山盛りのお飯を一日の仕事を終えたポーターたちが手であっという間に平らげる姿は気持ち良かったです。

夕方、集まってきた子どもたちに私も入れてもらって陣取り合戦に似た遊びをしました。



出会った人たちと、片言の英語と、身振り手振りで交流し、ただトレッキングするだけでは味わえない、人と人がつながっていく温かさを実感できたのが嬉しかったです



ポカラの郊外にあるチベット難民が暮らす地域にある寺院では、たくさんの僧侶が、中国による宗教弾圧で犠牲になった若い僧侶の成仏を祈っていました。

まだ幼い少年の姿もありました。

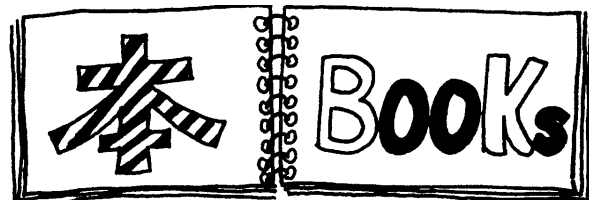


いつかまたヒマラヤに行く機会があれば、立派なサーダーになっているアンブラさんに会いたい。「サポート、心強かったよ」とちゃんと伝えたいと思います。



## 風の記憶 ヒマラヤの谷に生きる人々

貞兼綾子著 春秋社 2800円 + 税



今回、ヒマラヤトレッキングに参加する機会があり、少しでもヒマラヤについて知りたいと読んだのが本書です。

著者は宗教と民族の研究者であり、1985年から20年近くネパール・ヒマラヤを東から西へと大河の源流域を訪ねて、9つの方言の相異なるグループと14の共同体社会を訪ねて、宗教や、生活習慣などを丹念に調査し記録したのが本書です。ヒマラヤの谷に暮らす人々の息づかいまでが聴こえてくるようでした。

特にランタン谷に惹かれて、30年も谷の人々との交流が続いているという。「チベット高原の南西部を東西に弓なりに縁取るヒマラヤの山脈、その山壁一枚一枚に大小さまざまな谷があり、それぞれの谷に固有の生活習慣や言語をもつ人々の暮らしがある。さらにヒマラヤの最も奥深いところには、わずかな森林と植生の限界を示す草地、そして大部分を占める岩と氷の世界が広がっている。—ヒマラヤ史の中でもその白き峰々にもっとも近い場所に暮らす人々についてはほとんど語られることがなかった。旅の目的はこの人々に出会うこと、できればその人々が熟成する精神空間にまで分け入ってみたいとの思いからであった。」(本書より)



チベット系の人々が暮らす谷は、ヒマラヤの深い森林地帯をくぐり抜け高山帯にさしかかるあたりで、忽然と現れる。今回のトレッキングでもそうでした。また必ずといってよいほど、そこには谷を開いた言い伝えが残されているという。谷の発見者を人間ではなく動物にしていることだという。アイヌの人たちと共通することを知って興味深かったです。

ヒマラヤ山系の峰々全てに名称が付けられているわけでない。神が宿る山塊にのみ与えられている。山の名前を知りたいければ、注意深く、その谷に住んでいる人に「この頂きはどなたの座す場所ですか」と問うべきだろうとあります。エベレストももちろんそのひとつです。たくさんの登山者が世界最高峰と憧れ挑戦してきた山は神の座す山でもあります。

厳しい自然の中で生活する人々にとって、農作業や、家畜の放牧、人間の生死、結婚と誕生など自然との協調なしには彼らの生存や暮らしも成り立たない。私も今回のトレッキングで谷に暮らす人々の生活習慣に少しですが触れることが出来ました。

言葉(せめて英語でも)が話せたら、どんなにかもっと深い旅ができたのにと残念でした。厳しい山に挑戦するだけがヒマラヤの魅力ではないことを改めて知り、ランタン谷への旅に思いを馳せています。



## 励ます弁当 日本からドイツへ、さらに遠くの国へ

今泉みね子著 ランダムハウス講談社 1600円 + 税

1990年以来、フライブルクに住み環境ジャーナリストとして活躍する今泉さんが、人生の折り返し点で書いたエッセイです。

本書は、今泉さんが、ちょっとだけふつうじゃない人生の旅の途中で出会った珍奇な出来事、感動的な出会い、感心した発見などをユーモラスに描写しています。

特に印象に残ったのが「お葬式」の項。歌人だった祖母、著名な学者だった祖父、宮内庁に勤めていた父。皆それぞれに個性的で変わっていたこと。唯一、まともなのは物静かでさっぱりした性格の母だけだったという。その四人がそれぞれに亡くなり、故人の遺志で葬式をしなかったこと。それだけではない、お墓のある場所が四者四様なこと。常識にとられない生き方をされた家族の意志を尊重された今泉さんもすごいと思いました。ちなみにお母様は「骨の一部はドイツのベルヒュン山に撒いて欲しい」との生前の希望でその通りにしたこと

が書かれています。遠くドイツで、各地の環境問題の取り組みを日本でもたびたび講演会で紹介している今泉さんのルーツを見る思いがしました。

批判精神旺盛なドイツ人氣質や、ベルリンの壁が落ちて20年近くになりますが、世界で二番目にトルコ人が多い街というの、どんな生き方をしている個人として受け入れるオープンさがあるというの、意外でした。

ドイツからさらに遠くの国、アルゼンチン、中国、ヴェトナム、インド、マダスカル、スペイン領カナリア諸島、チェンジアといろんな国でのツアーでは味わえない旅で出会った面白い話がたくさん。(6pにつづく)

旅は危険と隣り合わせのこともあるけれど、未知との出会いはワクワクします。インドで、トイレットペーパーがない話。ネパールでも同じでした。トレッキングにはトイレットペーパーとウエットティッシュは日本から持参しましたが、無くなったらどうしようと不安でした。ロッジでも買えますが高いです。カトマンズのホテルでトイレットペーパーが備え付けられていてやっと緊張感から解放されました。

今泉さんの旅の話に登場するドイツ人の連れの半生は、苛酷な戦争の時代を食べるものもなくロシアから2年間も逃避行して、旧ドイツに着いたエピソード。連れは幼少の頃に涙を流しつくして以来泣いたことがないといいます。

お互いに訳あって独り身の二人。クールでつれない連れとの今後の気がなります。

## ボローニャ紀行 井上 ひさし著 文芸春秋 1250円

著者は30年間、イタリアのボローニャへの敬愛の念を抱いてきました。

第二次大戦後半のボローニャ解放運動でナチスと闘い、市民の手で解放を勝ち取った輝かしい歴史を持つ都市です。また文化による街の再生を集中的に行っていて、その手法は1970年代に「ボローニャ方式」として世界中に喧伝されました。

そんな街ですから、行ってみたいくなるのも当然でしょう。

志を持つ者が集まって協同組合を作りみんなで難問を解決していく、街を愛する人たちの心意気がすてきです。

イタリアといえばファッションの街、職人の街として有名ですが、みんなで住みよい街を作っていくさまざまな事例が紹介されています。たとえばボローニャの人たちは「演劇には見えないものが見えるものに変える力と役割がある」と信じていて文化の高さを感じました。

ボローニャ精神を体現したダリオ・フォーは中世笑劇の手法を駆使して現代人の一とりわけ中央の政治家や官僚の一不条理を抱腹絶倒のうちに描きつづけ、国内はもとより、ヨーロッパ中で高い評価を得てその功績に対してノーベル文学賞が与えられたのです。日本の演劇人口はどの位なんだろうとボローニャが羨ましくなりました。

女性が大事にされ、職人の技を誇り、歴史的景観や文化を大事にするボローニャの魅力がユーマアあふれる文章でつづられ楽しい。

私も旅の途上で読みましたが、ボローニャのイメージがふくらみ、いつか行ってみたいと夢が広がりました。



## だんぶり池ってなあに? ひろさき環境パートナーシップ21

問い合わせ先 弘前市役所環境保全課

環境調査トレッキングに参加した青森県の村田さんは、昆虫や鳥にすごく詳しい。夫と同じ中学理科教師と聞いて親近感がわきました。その村田さんから送って頂いたのがこの冊子です。

市民と行政が協力し合って、自然再生のためのトンボ池を作ることになり、場所選びからはじめたのがだんぶり池です。

村田さんのメールアドレスが変わっていました。ダンブリカナコになっているのです。どんな意味なのかな? カナコは奥さんの名前かしらと思っていました。この冊子を読んで謎が解けました。ダンブリは津軽の方言でトンボのこと。なんて温かくて豊かな表現でしょう。カナコはイトトンボでお歯黒を塗ったような黒いトンボをそう呼ぶそうです。タイトルは私の疑問そのものでした。

トンボってこんなに種類が多いとは驚きでした。豊かな自然環境を取り戻そうと、だんぶり池の自然再生事業を市民ボランティアで楽しみながら続けています。休耕田が見事によみがえり、たくさんの種類のトンボや、植物が育っていて是非だんぶり池に行ってみてみたいと思いました。

多様な生物とふれあう中で子どもたちは命の大切さや自然の大切さを学んでいるのが目に浮かぶようです。

2007年、農水省田園姿勢コンテストで、パートナーシップ賞を授賞しました。

今号は何故か旅の本ばかりになりました。映画は観る時間がありませんでした。次号では良い映画紹介出来たらと思います。

# 人の優しさに触れた旅

## ヒマラヤ環境調査トレッキング 高山病で途中下山



なりました。

タンポチエ(3867m)に着いた時は元気でしたが、心臓がドキドキして下痢、頭痛、食欲不振になりました。典型的な高山病です。前日にマスコミ関係の女性が高山病で亡くなったことを知り、残念ですが下山を決意しました。

ナムチエまではツアーリーダーとポーター3人で下山。ナムチエに3日滞在後シエルパ族のサーダー、アンプラさんと2人でルクラまで2日ばかりで下山しました。26歳の心優しい知的な青年でした。私をかばいながら、険しい道中を無事に下山させてくれました。別れの時は感謝の気持ちで胸に溢れ、言葉になりませんでした。

すっかり元気になった私はカトマンズからポカラに。ここからのアンナプルナ、マチャプチャレが素晴らしかったです。イムジャ湖もカラバタルも行けなかった私は、ひとり「人生には別のアンナプルナがある」と語ったエルゾグの言葉をかみしめました。

出会った人たちと、片言の英語と、身振り手振りで交流し、ただトレッキングするだけでは味わえない、人と人がつながっていく温かさを実感しました。

いつかまたヒマラヤに行く機会があれば、立派なサーダーになりたい。「心強かったよ」とちゃんと伝えたいと思います。



樋口 みな子

日本山岳会自然保護委員会と科学委員会共同のヒマラヤ環境調査トレッキング

に参加しました。4月23日から21日間の予定でエベレスト山群ローツェ山麓にできたイムジャ氷河湖の地球温暖化による影響などを調査する計画です。メンバー17人のほとんどは東京、神奈川からの参加で、私は紅一点でした。

トレッキングとはいえ、サーダー4人、ポーター12

左奥がエベレスト、右の大きな山がアマダブラム人、コック1人、キッチンボーイ7人、ゾッキョ(ヤクと牛を交配した動物)12頭の大部隊です。

エベレスト街道は、ほこり街道とも呼ばれ、のどが痛くなるほど。ゾッキョのウンチもそこかしこにあるし、ゴミは投げ放題。これにはびつくりでした。

参加者はそれぞれに役割を持ち、建造物、家屋の調査グループ、人口調査、住民の意識調査も行いながら進みました。私は、住民の意識調査と、流域の環境調査を受け持ちました。サーダーを引退したシエルパ族の方の自宅を訪ね、短い時間ですが生活様式や信仰生活について知る良い機会に

## 企画展

# 「加藤多一と北の風景」を是非観てください



北海道文学館（札幌市中央区中島公園1-4）で児童文学などの作家活動をされている加藤多一さんの「馬たちがいた」加藤多一と北の風景展が開催されています。

本展では、馬を題材にした作品を中心に加藤多一さんの文学世界を原画とあわせて展示しています。北の原野に生きる家族の物語「原野にとぶ橋」、戦争にまつわる悲劇を描いた「馬を洗って・・・」と「ホシコー星をもつ馬」、現代民話絵本「はるふぶき」4作の原画が展示されています。

加藤多一さんは銀河通信の読者でもあります。どうぞ加藤多一さんの文学世界をご覧ください。



チベット難民の女性がヤクの糸を紡ぐ

撮影5.8 ポカラで



ナムチエから見た朝日に染まるコンデリ

5月13日に帰宅して最初に行った山が春香山です。18日、春香山はまだ春の花がいっぱい。眺望は良くないけれど、ほこりだらけのエベレスト街道に比べて木々の緑が美しく、やさしい色合いの春紅葉に安らぎました。春の妖精カタクリがまだ咲いていました。



段々畑を牛を使って農作業をする人 ダンプス国立公園の近くで（ポカラ）

## 購読料をありがとう（2008.3.3～4.30）

但馬桂子（江別市）清水和男（福島町）高野ケイ（札幌市）吉野勝夫（札幌市）奥村由樹子（北見市）小泉照容（札幌市）河村健（札幌市）加藤多一（長沼町）大橋晃（札幌市）久能由弥（江別市）斎藤浪子（当別町）菅沼宏之（札幌市）亀田法子（江別市）阿部一子（福島市）田中清子（岩見沢市）本田明子（札幌市）森内美江（江別市）中川充（札幌市）伊藤恒雄（江別市）青木博信（札幌市）神原照子（登別市）後藤言行（小樽市）仲俣善雄（札幌市）カンパも含む石川悦子（旭川市）3,000円 三田英二（札幌市）3,000円 小栗宏（枝幸町）3,000円 里見清子（甲府市）5,000円 安川誠二（札幌市）5,000円 熊坂政昭（八王子市）5,000円 北芝梅子（京都市）3,000円 渡辺亜貴子（福島市）5,000円 三島春光（札幌市）3,000円 杉本裕子（熊谷市）3,000円 助田梨枝子（芽室町）5,000円 水尾君尾（夕張市）3,000円 倉田納（幌延町）6,000円（敬称略）  
 総額88,000円は印刷、送料に使わせていただきます。ありがとうございます。  
 またフライブルクの今泉みね子さんからは著書「励ます弁当」、弘前市の村田孝嗣さんからは「だんぶり池ってなあに？」の冊子を頂きました。ありがとうございます。

パソコンでも通信を読めます。http://briefcase.yahoo.co.jp/bc/ginganews150

郵送を希望しない方はお知らせください。（無料です）